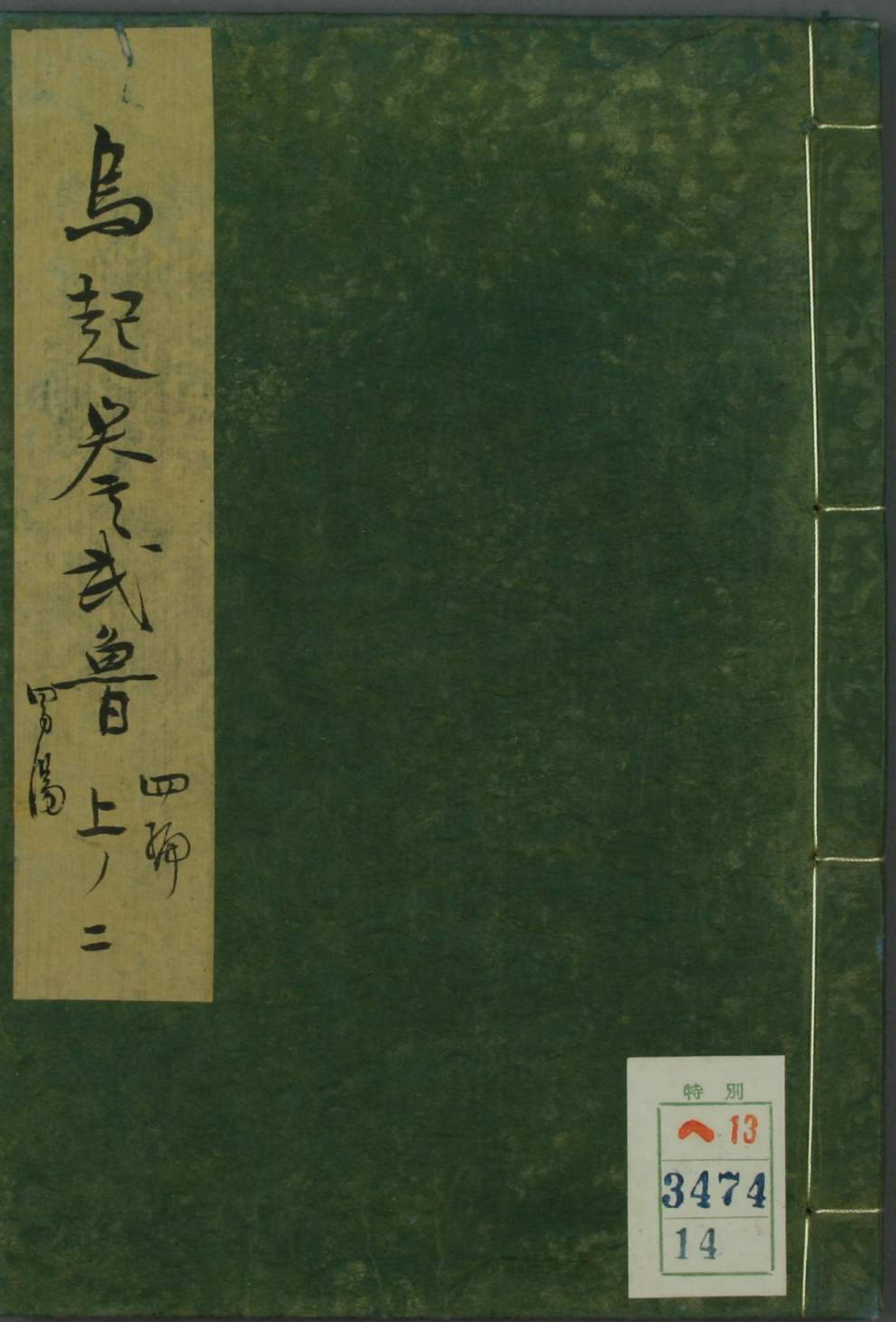


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 JAPAN



特



日記
二十七年
六月三十日
晴求

強きこのそとへこ馴居りんぐふ。先にれぢやア新ア。

ナアコレ誤理白

文ア事一スア。我ある酒アぐよしは上。

口論アうけス。そとを社ア。おらアまアとひと様アみがい

てアくよし。勝アらす。半ア食アが社アといふのよ半ア食アと云アらや

二本佩ア

ア

を捨アる。あくびが極ア。手アをすり半ア食ア。社ア甘ア

八半ア

ア

八半アやアは方等アりゆく。方アが極ア。手アをすり半ア食ア。

大切の心臓アたゞ後ア。一言もや沢山アきく。えもくア

ア

作「お」^ア「ハニサ鼻を食搔^シこぢやア祕^ハ「何^モきまう云
 純^シくまやア威勢^{イセイ}ぐ悪^{イイ}いふよ。些^シぞうり食^シなご^ス「病^シかの
 ちうみ誼^{シテ}宴^{ミクニ}どナ「そんうト又半腹^{ヒモウ}且大切^{ヒツカ}の山^{サン}。お^シ食^シ
 腹^{ヒモウ}とお^シぞり^ス「馬鹿^{ヤハラ}ア云^ス。文言^{ムニ}の人搔^シが悪^イくする。う^シデ
 た^シべ^シス^シ一^ヒ夫^ヒぢやア鼻^ヒを食^シておまうくゆう^シふ聴^キる^ス「ハテ。
 どうせ^ヤ神^ハ引^リ裂^ハく^シ物^{モノ}ア。主連^{シマツ}の松^{マツ}ふ云^シちやア^シト^シま^シ便^シ
 き^スれ^シで^シ海^{シマ}ご^ス「海^{シマ}福^{シマ}で^シき。そと^ハ江戸^{エド}ア^シ模^モ因^モ
 ま^シあ^シいは唐^カ人^ヒ也[。]又^シゾン^シト^シま^シう^シと^ナ。ト^シも^シと入^シま^シる。當^モ
 も^シの^シ走^シ逃^ハ命^モを

の位まの利と者へとて。トのまくとあへ作
へきり「もらア淨湯ウ浴ラモテス」夏の内きなう行
社セ「室ラ秋あきセ秋あきセモマシタ暑あつヒモテモシタ暑あつヒ中うち
這人まこと少すくな「あれラ湯ゆモ入いガモテア」ヲトモベアセ正
トムコモトモ風かぜ「警けい」けいモ音おとモ也よ
行ゆ。アイモタモトモトモトモ。浮世風呂うきよふろの邊へ、浮世床うきよゆと
名なフ。中本二冊。毎年出来できうるやく。入い出でのが一本多おほき多おほく
本多おほき。出でとらわされ○仰あお神所じんしょとまき鬼角おにの�番ばん終まつ暑あつヒの
番ばん終まつ上じょう○坊ぼう入り事こと

ハイも出でなまうほと「ヤ在あハまん。署しょの帳ともなまてと」
先生せんせい久ひもこつけアはせん。又何國どくも出でなまうほと
鬼おにアサ。越後えちごの方へりく。去年きょねんの暮くも丁と一年いち居ゐた
もとさき夕ゆふまでござだまと。雪ゆきふもとまうきまうきらういヤ
ハヤ越路えちじの雪ゆきだくつらういも深ふかれこときことで家いえを居ゐる。
番頭ばんとうも越後えちご者ものだくつらういも深ふかれません。あれも下くだ
よくてよ魚いわがほ山さんで立たぐ安やすい。女めが美うつくしと恰好あわせとひまく
びせくまつづ。江戸えどへ行ゆてもふ自由じゆゆと。其その代か江戸えどへ

金をおてゆる。とふ生ません。われが有浪はくとひふ下さす
鬼^ス。

「今やもなる。う金もつひこむ所さ。もし人も往なきとひこう
びまる。」

「おゆゆこと。越後へズト下越後の方半ばく廻り。浦^シ。
イマリ。私^ヒが^シ詰^シ。おまえさん方も甚^シみやふお遇ゆをふく
あふねぶ。越後の雪とまふ。大恩^{タノミ}。鬼^ス。雪の名所^{ナメシ}。
在でぬゆ。ト^シひあくよ。あくよ。^シびだらう。^シかくよ。
先^シえもひ。おどが。われが雪の詰^シ。て^シ候^セ。直^シは^シ。青さん
せんせん。そぞとみう。大波^{ハラ}。山^{ヤマ}。ハテチト^シ。よ^シ。猪田の
うみせん。そのつをうてかうる男^{ヒト}。

うみをうひやう^シ。が。とび八の方へ向ひ。極^シの遠^シ。イヨヅド^シ。とび
うをあご^シ。て^シ海^シのえふう。ゆきひます^シ。

ぢやア後^ト。東^シかぶ。まづ。われがもそれくるやうの。越後の山をふ
五六日も泊^シ。居^シ。タシカス^シ。よろくてト。霜月の下旬^シ。
であつよ。雪を一回^シに積^シ。て大屋^シ上より高^シ。その間^シ。
えどく。家毎^シ穴をあけておりて通用^シ。アそりやアよ^シよまう
隣^シの内へ用^シ。行うと^シは。一^シ隣^シといふが。里もある
あご。宴^シがち^シ。其^シ付^シ。板^シ飯^シを。四^シ寝^シへり。長^シい伴^シ
をねく。坐^シり。サア雪^シが障^シやど^シ。二町もあく。間^シ

三天位（タツイ）たらまち積る。コテ。二重もあり。所へ行くのどう。降
雪ふ積（のづか）れて。二里もいくと家をう體と埋（うめ）る。ナントもそ
からう。ハテありくせ。歩行とも歩負せ難。何とく。雪まづね雪油
楊（ヤマ）やの大粒で降るゆき。一粒降（おち）ると豆（アマ）が一ス五六すゞ
遙（とほ）なる。甚（ひ）く枝（え）を抜てん。歩行抜（ぬき）ぬ歩行とも肉（にく）よ丁（と）ど足（あし）詰
の齒（し）へ雪の溜（たま）れ。股（また）へ雪（ゆき）がとまらへ。と辨（べん）美（み）立往（さむ）と
まく。ソコテ。あきが極（きわ）く。彼長竿（さな）をまつ重（じゆう）く。そとふ
居（ゐ）まとると到頭（とうとう）あはの上へ二丈も積る。ハテところのよ。ま
く死（し）まぜう。そとが妙（めう）馴（なれ）物（もの）。其雪ふ埋（うめ）と中で彼擣（うち）飯を
食（く）る。コレ食（く）があまく。二日ハ大よまさ。ハテさて凍死（こじ）。ハサ
雪（ゆき）ハ積（のづか）てから凍てはゆくの物（もの）。陣（ぢん）の下（した）の腰（こし）の子（こども）。それ
でも息（いき）がほまりやせう。息のつまりまつみ財（たま）を彼長竿（さな）を
効（こう）ことと上（うえ）へ息牛（いきうし）の穴（あな）が開（あ）け。までも積（のづか）て雪（ゆき）へ雪（ゆき）の
か。効（こう）はこまひ。ハテ。陣（ぢん）の下（した）の腰（こし）といふ雪（ゆき）がう。キ（き）を
冰（ひや）ととかまく。内（うち）へ自由（じゆゆう）なり。と。ソレど和（わ）いりのす。ソレ
をどうをどう。番頭（ばんとう）。ハ。あじニ丈も積つてさゞいでどざのまぜう。ヨリ。

越後者あわせ、うまちやア納なまら種き人じんを越後えちごよ生うれてのそんそんみ
やふ遇あは福ふくのど。活ませ種きへく。ソニテ其その晚ばんを一夜よ雪ゆきの底そこで掘ほ飯めし
を食くる。アリそそを食くる。陣立じんてきの雪ゆきを風かぜが通とおす種きへく。かうて死死に喰くい
寢ねゆて寝ねきむらう。ソリヤ翌朝宿あさくの連つれのの人が來くふと。彼かれ
馬ま子こがワイと生うくわらう。ままを目印めいひササて鍬くわで掘起くわきし。
イいも近ちかいああ。ナントホ野ののぢやア種きへく。どうやら
大おほ寝ねららくのめり。又また濃のうららの下したもあくそそナなヘササ頭かしらが走はば。
今いままま先生せんせいまま恥はずうせ入はままよよぎく。手て組くみととがゆ。

ままうう遠とおの者ものと一いっ緒しょふ牒との門もんへ往むかて。用もちに達たどく解わかる。さう、
三さん里りもある道法どうぽうの正まこと。山さんも谷たにも雪ゆきでびるりんごう。雪車ゆきぐるまと
の物ものよ乗のと。そろそろとこり出でて。三さん里りの道みちを煙草たばこ一いっ彼かれ
間まお飯めしりやと。イエサやどうも寢ねよ濃のうのやうさ子こ。中なかよう業わざの
作さそアアアア。花はなのうよ遠とおごぜんや。私も越後えちごへ
往むかす。其その大雪だいせつの障さむい。が、寒さむい。が、冷さむい。が、寒さむい。が、冷さむい。が、寒さむい。が、
えんえんササ冷さむい。と。えんえんササお湯ゆりやア種き。主おも居ゐて小便こゑんをとる。
其その小便こゑんをひよぐ。内うち、尖頭せんとうの方ほうへ冰ひりすと。ままごうら

銃刀を離さむ。お居て硝子をもむ。極よ小便の尖頭と。ホキリと斬さぐ。小便のみと。サクサク皆まく角心をもひは。
作さんとね。八さんの掛合ぢや。なんく。なんく。どへばうべ打び子
作ス。纏をほり縫へり。なまく実況のひだり。もも
情で黒ねぐ。打までもうア。ユウく夫より。ぬ。雪女と云ふ
ク。ウニヤ。作。もトアコスミセ。流石のむねも寒栗とした。坐美
ざの。雪の化物。ごア。大入をゆで。もなりまう。所を。女とも
色まぶあくぞ。作。もみ化物も愛敬。ごアス。ぬ。も大雪の
穀々と寒の晩。どうけが。些。ひとと。まき。で。涙が。あつて。未始無
江戸へはれて。すみて。屁。でも。撒。今。う。と。り。ふ。ユウく。あく
雪女と。色。ゆ。う。おそ。や。い。ナサ。さう。り。か。涙。の。女。が。生。ま。で。甚
女。が。あ。く。飯。路。の。詩。よ。悪い。聴。か。う。ど。悪い。話。か。う。ど。か。う。ア
又。江戸へ連て。すみて。觀物。す。ど。も。り。く。う。ひ。の。と。ら。と。ア。が。う
い。や。雪女を連て。來りやア。途中で解て。経へア。その女の所
か。飯。が。け。ゆ。た。小武井嶺。とい。轟。を。一。越。そ。の。ざ。く。あれ。か
古越村へ。お。着。く。間。が。悪。く。ま。く。せ。ぬ。り。知。居。る。も。う。が

凄いふどナア「凄いの何のこと。あそぶ虎や狼の巣だ。登を
定かの立場^立モシく。雪の降る時^{ふきひさま}オ^と残ら^と究へ終
まさせ。そしておまえ虎を日本から住ませなりき」「其の住経へ
虎が住居る所^と凄いのス」「生詠接^{なげく}山嶺^{さんりょう}半道^{はんとう}
下ると千里^{せんり}升^{のぼ}と^と竹敷^{たけあし}がゆるのウ」「その竹敷の下^と雪
サ^と遇^あと^と腰^{こし}下^も下^もの襦^{じゆ}ア^作襦^{じゆ}ハテナ^作ハテナ^え「^えでも天窓^{あまま}
鬟^{くみあげ}毛^けう^め目^め鼻^{はな}をかけて、熱体^{ぬくたい}が真白^{ましろ}。ト^と髪^{かみ}をあつめて、^{あつめても}
そらに^とせ。ハテ今^まごと^と活^{まわ}せ。その財^{さい}を命^{めい}傷^{きず}目^め^めに^か幸^まむ

ほづぎ^{ほづぎ}あづぐ^{あづぐ}行くと。さうつくりと^とちとて、脣^{くちび}が。眞白^{ましろ}うりん
すりにして女の形^{かたち}ど只^{ただ}あづぐ^{あづぐ}。さくと震^{ふる}りの^とよ^と、薔薇^{ばら}
の幽^{ゆう}冥^{めい}^{めい}、「仰^あき。雪女^{ゆきめ}よ遠^{とお}ね^ねる。あれも寢^ねと一生懸命^{いっせいめい}
ざと見^く期^こキ^こ。雪女^{ゆきめ}は^はここかねと。其つあてへて^{あてへて}手^てが指^ひ
斬^きれるやうス。志^しむく取組^{とりぐみ}でゆき^{ゆき}。お^おがゆく^{ゆく}てあんまくふ
さくさん^{さん}と^と済^すく足^{あし}を引倒^{ひきひし}して。さうと轉^{まわ}んで所^{ところ}。グイと
鞆丸^{ともまる}を締^{しめ}と^とモシく。もう今^{いま}のお話^{はなし}で^す。雪女^{ゆきめ}とお^おや^やと
で^でお^おせ入^{さん}す^す。雪女^{ゆきめ}腰^{こし}下^もを^ときと^きせ^せ。雪女^{ゆきめ}

なまくが陰囊へひきまうも縫へりひご子作ハテそとが化物作トサ一
行はま「エ。ア。何さ。肇したるを雪女ゆきめのがあ。机合居る間あよ。五六丈斗
の方段さだよなまくさ。」す。そとぞそれ。是まことにも生れ。が。陰囊まくを
できさとうせす。まうぢやア縫へら。まもの。其そのもの。跡あとで笑わらふ。隨まつある
みどいとまうこよ。雪女ゆきめのが。底そこく冷硬ひんごれ。氷坐頭ひざくとなる。お。まう
まう。まうねうひまう。コウまう眉毛まゆをねねまう。彼かれのが。化かわかせ。
まう。やうも。縫ひをねねが。まう。まう。も。縫ひ。コア
まう。まう。到頭とうとうも殺さして。が。まう。と。あ。う。と。い。が。

一回の松原まつばコレコレ千里せんりが。叶は殺さと云い。まうぢやア縫ひ。イヤハヤ
大きお化かまれます。と。ふま。射加減ひじめよ。まま。作ま。も。まま
聴きまうよ。まま。其そのア。雪女ゆきめの。何なにを。食くららう。氷葛弱ひわくわくへ
氷ひも。やうを。防さて。食くららう。ト。り。まま。一。氷ひも。あが。ん。冷れ。人ひと
汲立くみたあ。が。ん。冷れ。の。一。ト。射さく。も。やう。道明寺どうみょうじ。入いき。まま。お。まま。ある。も。ら。ア
道明寺どうみょうじ。と。化物かぶつを。誠まこと。後あと。も。やう。ス。作ま。も。まま
まま。まま。よ。せ。まま。倦う。回まわ。白しらく。も。縫ひ。サア。ア。前まへを

ちくあき。ちきゅう あれもあでも飲ぶ。彼を忘れ。ライ番ス。三十二文
貸す。水を飲ふ。二十二文。四文があ。せハ文が變結。彼
馬鹿ア云ヤ。そん下生态。お頭ぢやア禪。一寸たゞねが五十文。

ライあや。そとふある砂糖をもりふまぬ。びちこんで一盃。いに
二十二文。サタグ。ハイく。作。萬歳をまじて。是。砂糖も糖でも
ませ。ア。種。本太白。ご。う。キ。ト。虚。を。げ。く。セ。此
も。也。も。作。仲。ア。ゴ。セ。コウ。も。脛。さへ。糖。を。く。う。此。男。と。あ。と。ふ
圓。角。ア。お。居。る。男。と。結。交。く。ま。る。ト。多。居。居。け。砂。糖。が

李を白ぢやア。秀。や。も。レ。地。が。わ。う。ア。船。二。幅。對。が。生。す。ほ。さ
ノ。作。茶。碗。の。中。ハ。砂。糖。の。中。ハ。入。て。飲。ひ。ト。呑。む。
ウ。も。毒。ど。種。ふ。わ。る。風。ウ。こ。う。ち。ハ。雲。の。上。人。ト。蔬。
餓。人。で。う。こ。う。は。せ。ん。ア。も。そ。や。い。正。直。請。え。も。な。う。く
き。あ。て。ら。ひ。ん。な。う。後。ライ。四。文。ト。水。や。れ。そ。り。や。二。二。文。よ。
ア。高。い。砂。糖。ど。か。う。ぎ。と。役。る。せ。お。い。く。も。の。賣。ふ。う。び。
ナ。サ。も。キ。く。ま。ん。ぐ。と。ど。も。も。天。き。む。が。合。う。惡。い。と。体。こ。勝。
ゆ。と。う。子。せ。ん。ひ。き。ゆ。り。引。合。せ。ん。ホ。シ。取。手。を。ま。る。か。う。う。物。で。

こまのまことへ其代ふ本源ひと縁へ。荷の借道で損失を
生じてうりへましらのものゆるまうでござひまとう私苦々せり。
で製す^{ヒサシ}た^トさきどらう。真諭の瀧が規性面よざとまくら。
渦巻^グもつとまくふ曲^クせ。ほいどごと余段意地が悪い
「それでも此行船を錦繪と決めてのちやア後^ア硝子の手^ト
渡^ハ大ち大便^ヨ及^ハご葬^ハを付^ハれがり。大^ハぐく^ハはせ
見^ハきね^ハるがゆ。ニウも^ハまん早くお仕事^ハ此徒^のに^ハ
遇^ハちるア懶^ハねへ^ト十二文^ハ水屋さんへのお荷物^ハ棚下^トニ^ハ

「その錢も番頭さんの手^ト出であるス^トホニヌ^トヤ^ト作
ふ貸^ハを誰^ハ証文^ハる^ト。」^セ利^ハきつと極^ハく元金^ハ忘^ハれ^トへり^ト金^ト
を行^ハてゆきア^ト利^ハきつと極^ハく元金^ハ忘^ハれ^トへり^ト金^ト
りふりの^ハな^トせね^ハまう^トト^トふう^ト小宿居^ハ隠^ハ
く^トヨ^ハ晚^ハを^トまん室^トお^トそ^トぞ^トご^トせ^トま^トう^トう^トそ^ト晩^ト
は山^ト聴^ハま^トた^ト聲^トハ^ト晚^ハを^トまん正^トか^トせ^ト私^ト等^ト今^ト待^ト
やせん子^ハテ^トも^ト人^トの無^ト未^トふ志^トる^トき^ト。金^トが^ト近^トく往^ト
き^ト人^トを^ト立^トけ^ト迎^ト其^ト通^トき^ト。主^ト人^トの憐^トき^ト憂^ト愁^ト悲^トせ^ト。

廉未みえ板をとねば。どの至る者でも幸抱き氣が生る。
畢竟も主まゝへ度て出る。ハテ万みづがまも順ドトシ。金銀
銭のみ。世中ゆきの宝と云ふ。大切にえ板ひ。後初もいふ
きみてつるど。富翁どもむづくねといふのうは。ナニモ
たる遊興の勿論のうづくら。却て費を省ひそへばぐる金の界
がゆうあせる。ハテつゞかの金銀どうし用向のうりもへ等ふ
す。はづれの獻通が悪い。また無盡のうゆ。バツバと湯気の
船よつうてふ。こしなまづく道併てあるまづく。雪の日やわざも

他の子様拾ひトゞかる。我が子ならび雪の申善きで
あうせよ。代のふゞく構ひときてをぬくをたれつひ。
雪せものうどと想像がなきれ。忠臣もあづく出生ね。漸く
網市一人をつゝく事うりともよく懸けてつづく。おづかの主人と
やうじ自おと忠義の心う記る。またとべば其のまゝ人ふ律義ふ
きて黒なるのを。主の事も繁昌す。やうじ事ふよろく奉
人も赤ぶらとひ。ナートマリ阿ーラ。あてふら。金銀も左の
通り。今娘の祐佑より利生が圓あど神佛の恩利あとく

信ゆてまわらう。まづ目みえぬがましい。ゆくも信ひごろふ。
金狼を信ゆてまづ金狼の利害がとんかうる。むちうどりの
浮虚伝が。まづ名めうりのゆ。信ゆと信ゆと書く。公と信ゆ
する。信ゆ。まづ早の醫諭をみて恥せよう。隠居が又ぞまづ
ことあり。まづ者の方の恥。まづ恥うきの薬へも苦い。さて
神仏を信心する。まづなりよ。信心せねばならぬ。心と信
してよのといふ。まづ親を伝ひてえまきの親の利害が加そ
其身も安乐。主人を信心とねば万なる主の意よけり出世する。
身を信ひ。まづは懐かず。身を信ひ。まづはおれ自身と
敬てくや。妻子を信ひ。まづ妻子がものと藤末。せど貞
孝をしてくや。まづ人ゆ列との通り。其正様の捷り正。
女郎と信ゆ。まづその。まづ振詰こぬとも。到頭真愛ふ
ゆく。まづ其私利。まづ家を失ひ。身を傷る。まづ又浮虚。
買そ。まづの。柄利。まづの。ハテ此方。信ひの。まづの。浮
癡。呆が何ゆる。あらぶ神仏の信心。其事通り。此方。浮虚
で。まづ拍子と。まづとして。銘をコロ。振まても。小男麻乃

ハツの耳下。半の耳でも。わづかと向て聴く。もとばかり。
さまでば佛前。あらうそ。酒をたたき。數湯代。切らうが。
まく。ひんぐも。あだやかの浮虚。佛事も。
不善かど。金がおよいくと。ひでらう。今と信心せね。金
の利益を。うの道理。なまうる。今も。金づきの
やうの家。けね。家。小半日も。居る。否。と。そいと。出で往
か。ソリヤ宵越の酒。金六たう。ま。酒を呑む。うぐい。
酒を信心。わが道営。を。生。嬌乱。とうり。放蕩の媒と

なる。此利益。まゝ身体を。とき減。レ。か。是等
捷く。信心の目。みえ。みどり。神仏の利益。す。有て。目
見え。金銀の利益。失。忍ち。目下。顯れる。神。此國。セ。明
る。一。が。お役。佛。を。後世。を。故。ひき。が。お役。その大切な神仏
さま。が。お役。佛。を。後世。を。故。ひき。が。お役。その大切な神仏
大。彼。お。立。て。ご。み。さ。い。他。と。やら。大。翁。神。本。社。宮。殿。建。立。或
そ。他。と。やら。寺。の。何。を。堂。建。立。再。建。ご。と。氏。子。や。檀。方
ら。す。も。さ。ら。そ。縁。法。界。ひ。く。す。も。一切。危。生。ふ。救。う。ま。く。

漁居所を製造する。宴會の金狼の功利を
神仏も信ずる所。あらわが凡夫はおらず、金狼を信し
まはう身一よ近道き。ハテありがたの世の中。あるも富半身湯
國へ生れ生じるを以ひるまひ日も、一度米飯を二階の木
かゝへ天上の榮光どもりてわれが体も不逞ふ。爾は者
勝ち起る。金銀とは山な世の中。アツアツがひるみどむく
頼朝公が南都の東大寺の寺が假へ金五十両とて寄進を
て。其年あやめふ旱魃。其臣は活もなづく。東鑑小
山

あり。頼朝様へ見え僅五十両の金が其頃に往言をいひ
きぐも。ひづかに盛衰記の物が枝が金すゞタタ二百あ
ねじよ。罰のあくとせび。ナントどうもひづく。アとも聲で
あれば。金もとあづか代の物を借うべし。二十二文で一盃と
勿倅うひど。ア其物がまぞ嘗てどあらず。君の馬車を付
死を縛る。主のお役立とありあむ。の武士。只今之銭
みども。二十二文で。若う体勞の足あてもなり。とゆうことを
ぬ。糖入れ。冷ひ一盃がまふかうて。体の大。ハテ一文で香料

途中仕事で不自由な付のる。安坐にて謹話をしてや。間違
チヨイト井戸へりけむ。浅いとど湯船うとのあはき。そんが高例
きよ。アレ。のの水舟のあてもむき。冷水とりて。宿偉の
相違で。水は熱水とらふめらう。伊豆の熱海の外は熱水と
つるりのひたとい。あくる冷いふ規へ。わざ。サビタガナ。隠居がえり
りのびとひだりうぶ。金づたまくよの。おぬのとひよ。此講釋を
作 イエカラう。湯ノ入すとまちびざしません。モリヤア百も素知よ子。
まきととす。晩 まちびざしません。モリヤア百も素知よ子。
まきととす。晩 まちびざしません。モリヤア百も素知よ子。

どもあれがお達者よ。寺内とその内蔵へ聴くをもぐ
なつのき。先別あくべの能活原。あゆのとまにかまく。升り下り
よきやうかき。高人作の男小桶を二つ。おもてあゆのとまぐすり
あくべの屋。鬼角。あくべのとまぐすり。高人作の男小桶を二つ。おもてあゆのとまぐすり
あくべのとま。ヤ高き活子。どうするか。こむらぐ、鬼角あみあみう
はくべのとま。新造まみと。機轆よも。バイ
あくべのとま。机轆よも。機轆よも。バイ
あくべのとま。机轆よも。機轆よも。バイ
あくべのとま。机轆よも。機轆よも。バイ
あくべのとま。机轆よも。機轆よも。バイ

「坊主めのぬ、枕函の種のことをぞうく解でさるを。さう
を季みかると一信きつめ迷惑さ。成程。成程。へい。
であまうはまう。イヤホニ。社會でもあせりてほと。一す。何と
てふまうす。此等私があらを通りうるに。十二三の調市
ちよくとまきてありはふ。やがて李子の油揚をさぐられは
鬼おにハテ子。私をぶ用事まで參じた。フウ。彼
只今の底をえうひまして。うそ。一句あつまう物と存あこ。
往く勘舟にして到頭高纏まく。からと苦しまと。今ま
四風流するのでごろと。エハとナ。ハ。ア。斯マサニほふ。是でも
よひふとどまうはせう。モト。ト目と眼めども。京ばーの。フム
キシガ。鳥。とび。あまくひづり揚豆腐ゆだふ。鳥。大のほめ。あまく
ゑぬ向ふ相うりはせう。鬼おにハ。イヤ。隨スルまく。ごぜせう。鳥。ハイサ。
私をやの模好で巻角ア。めさごめのやう。俳諧とやら
連。おとせら。耳を勿通。ホイ足でア。も猪多助の淨きりにさり
ほ。シメガきゆみなぐまみが好物で。ごろはと。を
ひ覆ひ。あらかと下まうは。それ。私のるよなう。

四風流するのでごろと。エハとナ。ハ。ア。斯マサニほふ。是でも
よひふとどまうはせう。モト。ト目と眼めども。京ばーの。フム
キシガ。鳥。とび。あまくひづり揚豆腐ゆだふ。鳥。大のほめ。あまく
ゑぬ向ふ相うりはせう。鬼おにハ。イヤ。隨スルまく。ごぜせう。鳥。ハイサ。
私をやの模好で巻角ア。めさごめのやう。俳諧とやら
連。おとせら。耳を勿通。ホイ足でア。も猪多助の淨きりにさり
ほ。シメガきゆみなぐまみが好物で。ごろはと。を
ひ覆ひ。あらかと下まうは。それ。私のるよなう。

鬼角

「ハ」トだくさう「兵
まくま虎」「あはーのきるさくひくう揚立窟内」
地口。も待うたの地口といふのである。雅健の兵者林

とせうかうはせう。タニカ。ねとう唱くまゆう口調がゆ
やうじテ。地口といふのも、發語の文字が同字なれば冠とよて
名づゆがゆ。是と此方の圓
ヤと何の邊も式のめうりので。すゞらふい地口され
ども。兵者地口となれど冠とえ字や兵者なまくねとよとま
ゆ常ゆがゆ。地口をいふ人も。兵者でどうくちせぬ「兵」。

まくさうなまくぶ堀江町の鰻鱈舗の亭主「兵」山田庄兵

え
ゆとく。あの男の地口。うく兵取へらまの「兵庄兵」
いふで。ごうりあそと「兵」うるまく船魚をほうぶ。地口は悪
地口。トント戯作者の口調ごテ子。戯作者本や。諸路の船魚と
地口をあくべいゆを用ね。名その道とぞす。アモとこら舟と
舟をあくべ戯作者本の意とぞる所。又行燈の地口。船地口と
舟。あくべ繪と表にして。絵を拂る地口。舟を拂む地口と
舟。兩側を繪ひりの舟。宇敷船をもじして。早く解り

ちふとほんでもかく作ふが本意ぢやげふどするへエ。まうやど、
まきうみうち私のすはゆみの俳諧よまうだ。地図よなもと。在柳
狂おでこまうはせうう^鬼トエ^点。狂すでへまい。そ。まうそれへト
まふ一ア。下アゆき。只の十七字さへエ。只の十七字。ト小びをが
鬼りうの
一休まぶ主意とむる西晋子の向^点へエ。緒洪と一緒ふ
はひまも。彼^点鬼^点イエサ。宝晋永^点すまうわど。もくくま
の坊^点まぬの地^点。足^点へどじ^点この。宝井其角の向^点へ立^点
町の猫通ひ^点う揚^点五町といふがごと^点南無三室^点まうき
秋^点うゆみでとまうりあふと。イヤモウそれをりぞぐ^点基^点に^点廣^点井
あまひつてま^点ど。ま。まきうなう^点が近日^点。トあ^点鬼^点屏風^点の^点交重
まうとお書^点をあ^点向^点。イヤス^点通^点。トント^点ひそ^点ハマ^点ト^点通^点。
鬼^点

顔の薬

兼用

あとも^点薄化粧

百文

本町二丁目式亭三馬。

